平成２５年度研究成果報告書《平成25年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	7	都道府県・指定都市名	福島県
学校名（生徒数）	福島県立会津学鳳高等学校（７１５人）		

（本研究に係る問い合わせ先）
所在地：福島県会津若松市一箕町大字八幡字八幡１番地の１
電話番号：０２４２－２２－３４９１
学校ＨＰのＵＲＬ：http://www.aizugakuho-h.fks.ed.jp

【研究成果のポイント】

○研究課題番号：４高等学校
○研究対象教科等：芸術科　書道
○研究のキーワード
・穴埋め方式で生徒が自ら書こうとする言葉を選定
・意図に基づく表現の構想と工夫
・用具・用材の理解と活用
・自ら表現しようとする意欲の向上
・語彙力向上を図る他教科との連携
○研究成果のポイント
生徒が言葉を生み出す過程を工夫し,自分の言葉を題材にすることによって意欲を高め,自ら主体的に表現し，書道に対する興味・関心の高まりから，生涯にわたって書を愛好する心情を育成した。

【研究の目的，研究内容】

（１）研究主題

漢字仮名交じりの書における言葉(素材)の選定と表現を構想，工夫する指導方法の研究

（２）研究主題設定の理由

平成 21・22 年度と「鑑賞力を育成するための相互評価の工夫」というテーマのもと,「漢字仮名交じりの書」を題材に研究を行い，生徒の書道に対する興味・関心の高まりと自ら表現したいという意欲の喚起という点で成果を得た。しかし，古典の臨書や生徒作品の鑑賞から学んだ表現力を自らの作品に応用する力や，適切な言葉を円滑に選定する力の育成はまだ向上の余地が残されていると感じた。本研究では，生徒の語彙力の強化と題材とする言葉の深まり及び生徒各自が意図に基づいて表現できる力の育成を図りたいと考え，この主題を設定した。

（３）研究体制

校内において文科省指定研究実行委員会が組織され教頭２名，教務主任（中・高各１）２名，国語科（主任１・授業担当者１）２名，研究者１名の７名で構成された。福島県教育庁の指導を受け，福島県高等学校書道教育研究会より専門的な側面での指導を受けた。

（４）１年間の主な取組の経過

	月	研究手順	研究内容
	4	**オリエンテーション**	・書写から書道へ，書道の用具用材の理解
			・自分を表す漢字・言葉による自己紹介作品の制作
		国語科との協議	・「Ｍｙ言葉リスト」の実施（～ 10 月）
平	5	**古典（楷書）の学習①**	・唐の四大家と北魏の楷書の鑑賞と臨書（６作品）
	6	福島県研究大会	・福島県高等学校書道教育研究大会で発表と研究協議
成	7	**古典（行書）の学習②**	・行書の基礎（硬筆を含む）
			・王羲之と空海の鑑賞と臨書　・行書による創作
25	8	国語との連携強化	・国語の授業内で言葉の紹介を実施（～ 10 月）
		学校訪問（先進校視察）	・岩手県立一戸高等学校の視察（図書館との連携）
年	9	**漢字学習のまとめ**	・キーワードで分類　・古典を生かした創作
	10	**漢字仮名交じりの学習**	・漢字仮名交じりの書の鑑賞と創作（～ 12 月初旬）
度		公開授業①	・公開授業（２時間）及び研究協議会
		公開授業②（県）	・公開授業（１時間）及び研究協議会
	1	教科指導研究会（県）	・研究発表と研究協議
	2	**仮名の書の学習**	・古典臨書　・自作短歌による創作

（５）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

①選文方法の工夫

「あなたが（君が）○○だから　私は（僕は）○○になる」という言葉の型を使い，穴埋め形式による選文を行った。20 分程度で言葉が選定でき，生徒が楽しく言葉づくりに取り組むことができた。

②言語力の向上

ア「Ｍｙ言葉リスト」の実施：普段の生活や授業，学校行事など日常生活の中で印象に残った言葉を週１回リストにまとめ，普段から言葉への興味・関心を高めた。

イ国語科と連携：国語の授業内で言葉の推薦を行い，「Ｍｙ言葉リスト」と関連付けながら言葉に対する感受性を高め，語彙力の向上を目指した。また「仮名の書」の学習において自作短歌の添削指導を行い,適切な言葉の選定と配置について理解を深めた。

③意図に基づく構想と表現力の向上

アワークシートの充実：古典臨書（楷書・行書）による基礎的な技能と知識の定着を図るためワークシートを活用し，古典作品毎の表現の差異を用語で分類した。漢字仮名交じりの書にも同様の用語を使用し,制作の意図と古典の技法を生かせるようにした。

イ簡単な創作の導入：行書の学習後と漢字学習のまとめとして「Ｍｙ言葉リスト」を題材に簡単な創作を２回行い，自己を表現することの楽しさを実感させた。

ウ鑑賞と制作の効果的な配置：漢字仮名交じりの書において，鑑賞と制作を交互に配置した。言葉づくり，制作意図，全体構成と墨色，墨の潤渇と文字の大小の４工程を設定し，主に生徒の参考作品を鑑賞した。そのため漢字仮名交じりの書をより身近なものとして感じることができ，積極的な試行錯誤につながった。

エ用具・用材の理解：年度当初に筆墨硯紙の実物を手に取りながら用具・用材について理解を深めた。磨墨して自分を表す言葉を題材に自己紹介作品を制作し，用具・用材について基礎知識を学んだ。漢字仮名交じりの書の制作時は茶墨，青墨，柔毫筆，剛毫筆と滲み方の違う画仙紙を 3 種類準備し,表現意図に応じ選択できるようにした。

④言語活動の充実

ア話し合う場の設定：制作意図の方向性を決める場面や，各段階での作品提出時に簡単に相談の場を設け，提出物を決定させた。

イ相互評価の工夫：完成後に名刺大の「他己評価カード」を使って相互評価を行った。インタビュー形式で作品紹介を実施し 20 名分程度を短文でまとめて交換後，他者からの評価を参考に自分のまとめに生かした。段階ごとに目標を明確にしながら制作を進めてきたため評価する視点や言葉の選定が適切であり，個々の鑑賞力が深まった。

【研究成果とその意義等】

（１）研究成果

この研究を進めるに当たり，生徒に対する的確な指導を目指した結果，生徒一人一人がさらに良い作品にしたいという強い意志を持って言葉の選定から制作に至るまで主体的，意欲的に取り組むことができた。より良い言葉を求めて模索する過程は活発な言語活動につながり，丁寧につくられた言葉は表現力の向上に結びついた。課題としては国語の授業で書道の活動が取り上げられることにより言葉への興味と制作への意識付けはできたが，システムの構築までには至らなかった。また，今回は漢字仮名交じりの書以前の学習が楷書・行書のみであった。仮名の書において散らし書き等の学習をした上での作品制作となればさらに構成力の向上が期待でき，表現力の向上につながるのではないかと考える。

（２）研究成果の意義等

穴埋め形式にすることにより言葉の選定が効率的に行われ、制作時間が多く確保できる利点がある。また立派な言葉でなくともふと頭に浮かんだ言葉を入れるだけで題材が完成するため，様々な高校において活用が可能であり，母体となる言葉のスケールを指導者が示せば多くのバリエーションを生むことができると考える。

（３）指定期間終了後の取組

今後も継続して次年度の「漢字仮名交じりの書」に取り入れていく。完成した作品は誰でも鑑賞できるような状態で掲示してあるため，書道選択者以外の反響も大きい。本校は中高一貫校であるため，中学生の目にも触れる機会も多く，作品一つ一つを声に出して読み上げながら通り過ぎる姿がとても印象的である。現在中学１年生の書写も担当しているが書写の学習活動の中に今回の言葉の穴埋めを応用し，生徒が自ら選定した言葉を書く活動を行うなど芸術書道への接続を検討していきたい。